



今回の内容

- 「餌をやるから猫が増える」は正しいのか。立命館大猫の会の活動記録からの一考察。

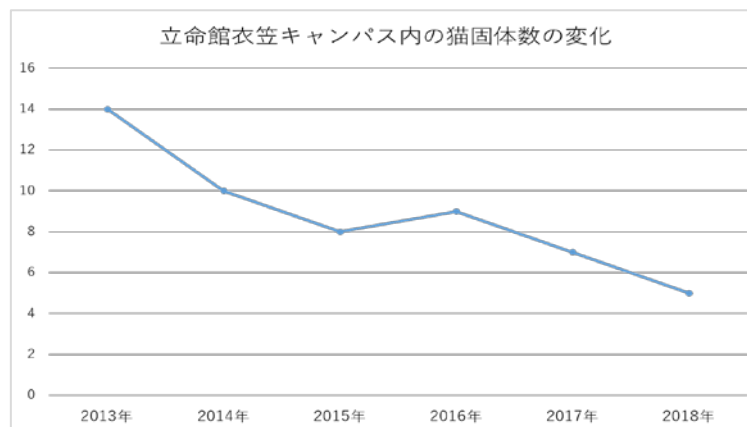
「餌をやるから猫が増えるんだ！」

ノラ猫問題については話をする時によく耳にするのが「餌をやるから猫が増えるんだ！餌やりを禁止すればいいじゃないか！」というご意見です。あれこれ皆で地域猫活動をするとか TNR 活動をするとか時間も手間もかかるややこしいことをしなくても餌をあげている人を特定して強制的にやめさせれば手っ取り早い、低コスト、低労力だという主張です。はたして本当にそうでしょうか。

今回のマガジンでは、猫に対する「可愛い」「可哀そう」といった感情論を除いて「餌やり」について実践データを元に考えてみたいと思います。

大学猫の頭数変化

以下のグラフは、立命館大学衣笠キャンパスにおける大学猫の頭数です。



立命館大学猫の会 RitsCat という大学猫サークルが、毎朝毎晩学内に生息する猫にエサをあげています。1日2回もエサをあげているのに、猫の頭数が減っています。

「餌やり」を猫問題の唯一の“原因”だと考えてしまえばそこで思考ストップですが、餌を与えながらも猫が減っている事例がある以上、「餌やり」も一つの“要因”であると考え、「餌やり」以外にどんな要因がどのように組み合わせればどんな結果が生まれる可能性があるのか、検討してみたいと思います。

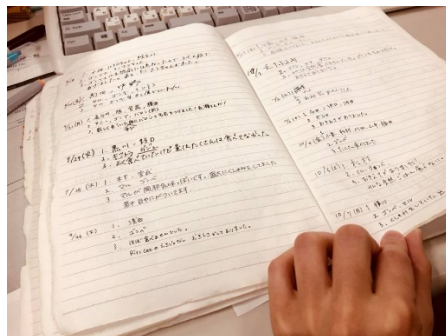
※【原因】ある事象を起こした元となるもの。基本1つに特定される。

【要因】ある事象が起きたことに対する影響を与えたもの。基本複数存在する。

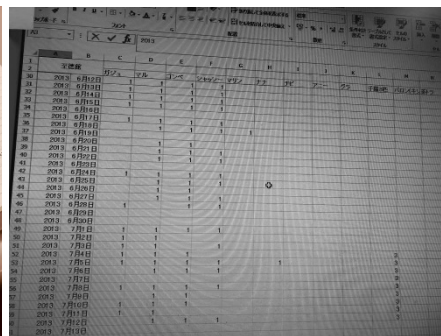
検討をする材料にしたものは、RitsCat の餌やりノートです。餌やり時に、「どの猫がどこに餌を食べに来たか」が主に記録されています。過去6年分のノートをデータ化し集計しました。とっても大変でした(笑)。



餌やりノート



毎日の記録



データ化 (大変でした)

「猫」も「餌やり」も問題の“原因”ではなく“要因”

私たちは、物事を考える時に「A という原因」があって「B という結果」がる。というシンプルな因果論でおさまるように考えがちです。分かりやすいですし、小学生のころからひとつの問題に対して、ひとつの回答欄がある卓上のテストを受け続け、卓上の理論をたくさん身につけて大人になるわけですから当然です。したがって、ノラ猫の苦情が問題になると、まずは下記のような考えが出てくることが多いです。

●ノラ猫の存在が問題なんだ → ノラ猫を排除すればいい。

具体案：保健所で殺処分してもらおうか、ボランティアに全頭保護してもらおう！

となります。現在は殺処分目的の猫の捕獲ができないことや動物愛護団体はどこもキャパオーバーで全頭保護してもらおうことが不可能だとわかると次のステップとして・・・

●餌をやるから増えるんだ → 餌やりを禁止すればいい

と考えがちです。実際この第二段階に留まり、餌やり禁止看板やチラシ、餌やりをやめるよう説得するという事に労力を割いている自治体も多くあります。

私が問題と取り組みを考える上で理論ベースにしている「家族システム論（猫アレンジ Vr）」では、実社会では一つの明確な原因が問題を生み出しているのではなく、様々な要因が影響を及ぼし合って問題を生み出していると考えます。



立命館大学猫の会 RitsCat の活動内容を深堀りしてみる

立命館大学猫の会 RitsCat（以下 RitsCat）は、大学構内を主な生息域とする猫を「大学猫」とみなし、TNR（Trap/捕獲し、Neuter/不妊去勢手術を行い、Return/元の場所に戻すこと）、給餌、糞尿の掃除、を継続的におこない、大学猫に一代限りの命を全うしてもらいながら、猫の繁殖増加や鳴き声、ゴミあさり、糞尿の臭いといった猫トラブルを最小限に抑えた大学環境を確立維持する取り組みです。行政やボランティアとの協働や周辺住民との合意形成はありませんので、狭義の地域猫活動には該当しませんが、取り組み内容は地域猫活動の理論をかなり参考にしています。

RitsCat が大学猫活動によって「猫の頭数がゆるやかに減る」と想定した理論仮設は以下の通りです。

1. TNR の実施により新たな繁殖を防ぐ。
2. 発情期による縄張りを越えた猫の移出移入を防ぐ（不妊手術を実施するため、大学猫のメスは発情期に別コロニーのオスを呼び寄せなくなり移入が減り、大学猫のオスは発情期が来ないため、別コロニーのメスを求めて移出することが無くなると考えられるため）。
3. 時間設定のある餌やりの実施によって新たな猫の移入定住の確立が下がる。
4. 猫が寿命等で死亡していく。

1～4の要因によって猫の頭数がゆるやかに減っていく結果がでると考えています。少し補足します。

「1. TNR の実施により新たな繁殖を防ぐ。」

不妊手術をすれば子どもが生まれないということに関して異論は無いと思いますが、TNR のやり方として、例えば公益財団法人どうぶつ基金が呼びかけている「即行」「徹

底」「継続」のような TNR の三大原則をきちんと守れているかどうかは一つの大きなポイントだと思います。猫は1年間に1～4回出産することができ、1度に1～7匹の子どもを産みます。それを忘却し、20頭くらい未手術の猫がいるのに、月1、2頭ずつ TNR をする計画を立ててしまったり、20頭中19頭に TNR をして満足して放置してしまったりすると、「TNR をしたけど猫は減らなかった」という残念な結論に至ってしまいます。しかしそれでは「TNR を実施した」とは言えません。なるべく早く全頭に TNR を実施し、新たな猫の移入や手術もれの猫が見つかった場合はすぐに TNR を実施するという体制を継続することが必要です。

「2. 発情期による縄張りを越えた猫の移出移入を防ぐ」

ノラ猫の生態調査を7年にわたって実施した山根明弘さんの著書「わたしのノラネコ研究（さえら書房）」を読むと、発情期に約66%のオス猫が自分のコロニー出て、別コロニーの発情期のメス猫に求愛しに行く「繁殖戦術」という行動が観察されています。これを参考に考えると別コロニーのオスは、ただメス猫が居るところではなく、「発情期のメス猫がいるところ」をめがけて遠征してくると考えられます。したがって、TNR を全頭に実施しることができれば、大学構内に猫が居続けたとしても、発情期が来ないため、別コロニーのオスを呼び寄せなくなると考えられます。また、不妊手術を実施した大学猫のオスは発情期が来ないため、別コロニーの発情期のメスに惹かれて移出していく行動もなくなりネココロニーが安定する可能性が考えられます。

「3. 時間と場所設定のある餌やりの実施によって新たな猫の移入定住の確立が下がる。」

●RitsCat の餌やりルール

各コロニー（現在2カ所）、朝10時頃と、夕方17時頃に当番の学生たちが餌を持っていきます。大学猫たちが食べ終わるまで見守り、食べ終わったら残飯を撤収します。また給餌の間に常設している水皿を洗って新しい水を入れます。猫のトイレスポットの掃除もあわせて実施します。

ここも大きなポイントです。よく、「食べれない子がいると可哀想だから」とか「気が散ると思うから」という理由で、無人状態で何時間も餌を置きっぱなしにしているという話を聞くことがあります。でも、それではたまたまその餌場を通りかかった猫が「ここには餌がある」と気づいてしまう機会もぐっと増やすことになります。そうすると「新しく強い猫が入ってきて、今まで食べに来ていたのに来れなくなってしまった…」という事態になることも容易に想像がつきます。そこで、「決まった時間に決まった場所で、いつもの人が見ている前で」なら餌をたべられるという**秘密のルール**を手術を受けてもらった

(受けてもらう予定の) 大学猫たちと管理者が共有することが重要だと考えられます。そうすれば、たまたま大学近隣を縄張りにしている猫が大学構内にふらっと入ってきたとしても、通りかかった時間がちょうど餌の時間じゃないかぎりただの通過で終わるでしょうし、万が一餌の時間に通りがかったとしても見ず知らずの人が近くで見ているところに餌を食べに来れる猫は稀です。**縄張り**は人と猫が協力してはじめて安定化するのではないかと感じています。

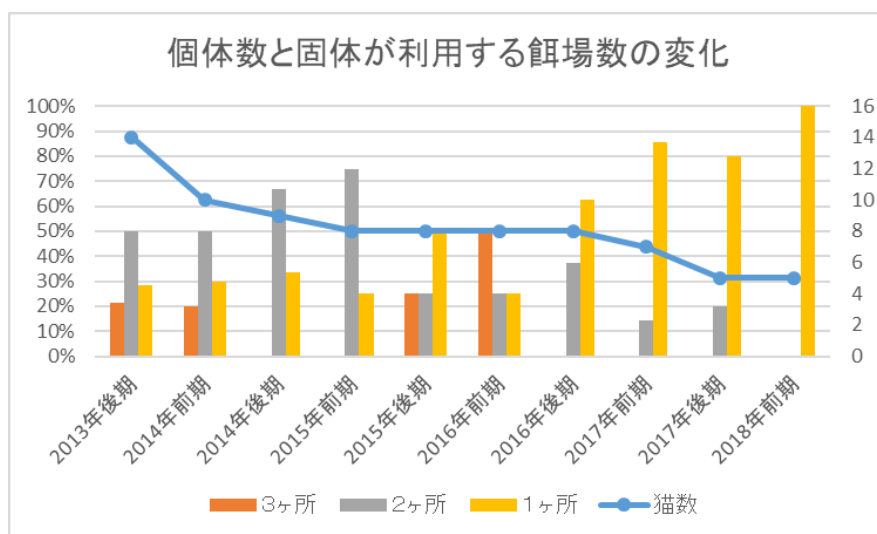
しかし「猫の縄張り意識」について議論が分かれます。例えばアメリカで発表された「ノラ猫数の長期的 TNR & 里親募集プログラムの評価研究」では大学構内で 115 匹 11 コロニーの状態から、①TNR と②里親譲渡、③エイズ白血病検査陽性の猫に対する安楽死、この 3 つを 11 年に渡り実施し大学の猫は 23 匹になったという研究です。そのまとめにおいて、「長期的な TNR によって長期的にノラ猫の数を減らしていくのは可能である。(中略)。猫は、コロニー間の移動であったり、遺棄によって、新しく加わってくる。ノラ猫の**縄張り意識が薄いこと**によって、**移入を防ぐ**べきがない。(後略)」と結論づけられています。ただし、この論文を読む限りでは、TNR をどのようにすすめていったのか(端のコロニーごとに実施していったのか、まんべんなく実施していったのか、どのくらいのペースで実施したのか)が書かれていません。また、「餌はボランティアによって毎日与えられ、残り物がでたり他の動物が食べないように調整された」と書かれていますが、具体的な給餌方法は書かれていません。RitsCat 給餌方法では 2 つのコロニー、計 5 頭でも 1 時間ほどかかるので、これだけのコロニー数と頭数だとどのように給餌しているのか気になります。また、115 頭中、里親譲渡と安楽死が 90 頭おり、人為的に猫をコロニーから頻繁に抜き取っていることがコロニーの不安定さの要因になっている可能性もあるのではないかと考えられます。RitsCat の場合、学内で生まれた子猫や遺棄が疑われる子猫を里親に譲渡したことはあるが、基本学生が実施している取り組みのため積極的な保護里親譲渡は実施していません。譲渡した猫は 1 匹の病気の猫を除いて離乳前の幼齢個体でありコロニーに影響を及ぼす以前の個体だと考えられます。したがって、他の論文で猫は縄張り意識が薄いと書かれているから、縄張り意識はないんだと結論づけてしまうのはまだ早いと思います。

次に、RitsCat の活動記録を猫の頭数以外の側面からも見てみたいと思います。

RitsCat の活動結果、餌場の固定化

次の図をご覧ください。ブルーの折れ線グラフは最初に見ていただいた猫の個体数変化を示しています。記録がある 2013 年時は 14 頭の猫が確認されていましたが、2018 年現在は 5 頭に減ってます。活動が始まった 2011 年の頃は 20 頭近くの猫がいたと思います。2011 年から TNR を実施しはじめ、2014 年後期の時点で、学内で確認されている猫の

100%に不妊手術が完了しました。



カラフルな棒グラフは、1頭の猫が利用する餌場の数を示しています。当初は学内に3ヶ所、ネコロニー（猫のコロニー）がありました。したがって餌場も3ヶ所ありました。オレンジの棒は、3か所の餌場に食べにくる猫の頭数を割合で示したものです。14頭中3頭の猫は3か所の餌場を利用していることが分かります。グレーの棒は2か所に食べにくる猫、黄色の棒は1か所の餌場に餌を食べにくる猫の頭数を割合で示しています。データを取り始めた2013年の時点では、71%の猫が複数の餌場を利用しています。猫の行動範囲が広く不安定だったことが見えてきます。そして、活動を始めてから7年目、TNRを全頭に実施完了してから4年目にあたる2018年前期の時点では、生息するすべての大学猫が一か所の餌場のみを安定して利用するようになったことが分かりました。

まとめ

大学周辺には管理されていない沢山のノラ猫がいるにもかかわらず、大学構内のネコロニーが安定して、ゆるやかに頭数が減っています。

餌をあげているのに猫が減っている要因は、「決まった時間に、決まった場所で、決まった人たちの前でならごはんを食べられる」という秘密のルールを大学猫たちと共有していること。つまり、「人と猫が協力することによって手術を受けた猫も縄張り続けることができる」と考えられるのではないかと感じています。

猫の複数の餌場利用が一か所に固定化したというだけで猫の縄張りが狭くなったと解釈していいのか等少々疑問も残る考察ですが、大学周辺には無秩序にノラ猫がたくさんいるにもかかわらず、キャンパス内の猫の個体は減少固定化し、新たな移入が無いということは猫の縄張りに関する注目できる結果だと思います。

道徳や感情論を抜いて考えた場合に不妊手術を受けた猫がその場所に居続け、新たな移

入猫を防ぐ最大のメリットは「コスト」です。せっかく TNR を実施しても手術を受けた猫は移出し、未手術の猫が移入してくる状態では、未手術の猫が移入してくるたびに不妊手術の費用と労力がかかってしまいます。低コスト、低労力で環境を維持するためには不妊手術を受けた猫たちになるべく長くそこにとどまって縄張りをはっていてもう必要があります。

今回のマガジンでは、猫に対する「可愛い」「可哀そう」といった感情論を除いて「餌やり」について実践データを元に考えてみたい初めに書きました。ここまで書いて少し付け足したいと思います。

「餌やり」については、「可愛い」「可哀そう」「嫌い」「ムカつく」といった感情論を除いて「やるやらない」の議論ではなく、環境を良く維持していくための「方法」を考えていく必要があるのではないのでしょうか。安直な「餌をやるな」もまた猫や餌を与える人への嫌悪感等が産んだ「感情論」だと言えるでしょう。そしてもちろん、放置したり、ばらまいたりといった無秩序な餌やりも要注意です。

給餌方法以外に見えていない要因がある可能性も十分に考えられます。突然見知らぬ母猫が餌場に現れて子猫をおいて、母猫自身は去っていったという話もいくつかの現場で聞いたことがあります。今回紹介したデータはあくまで、1カ所の事例です。実施場所の環境要因も大きく影響するでしょう。もっと色々な現場で実施している TNR とマネジメント（大学猫活動や地域猫活動など）の実践を比較検討する必要があります。このマガジンで餌やりに関する考察をあげたのもこの一つの仮説を元に別の現場で活動している人が自分の活動を振り返って、否定や肯定の新たな仮説を立ててくれれば、議論が深まりもっと猫問題を改善するための成功要因が見えてくるだろうと思うからです。自分の現場ではこんな事があった、という情報があればぜひ教えてください（最後にメールアドレスを書いています）。昨年福島大学で開催された第3回大学猫シンポジウムに参加させてもらった際にぜひ毎日の活動の記録を取るよう呼びかけました。今年の第4回大学猫シンポジウムは京都大学で開催される予定です。沢山の大学の実践が積み重なっていき、なにが見えてくるのか楽しみです。

おわり



小池英梨子

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」 プロジェクト代表

「ねこから目線。」としてフリーでも活動中。

意見・感想・お問い合わせ：e.kosame12@gmail.com